

1月
2016年

138号

地域共創・未来共創の大学へ

広 沖縄大学 報

発行

沖縄大学経営企画室

〒902-8521 沖縄県那覇市字国場555

☎ 098(832) 2910

http://www.okinawa-u.ac.jp



2016 謹賀新年

Contents

- | | |
|---------------------------|-------------------------------------|
| 02 年頭挨拶 | 10 学生インタビュー（石橋由季子） |
| 03 宮古・八重山奨学金／父母懇談会 | 12 学生インタビュー（北川穂乃香） |
| 04 2015沖大祭 | 13 学生インタビュー（北川皐月） |
| 05 硬式野球部／学P | 14 リレーエッセイ（教務課 上江洲光司） |
| 06 職員インタビュー（横山正見） | 15 研究のひろば（小林甫）／わがゼミナール（須藤義人） |
| 08 卒業生インタビュー（田中息吹） | 16 教職採用試験等の合格者 |

学長コラム④

人生と時間

仲地 博

20年以上も前のことであるが、子どもと一緒に熱心に読んだ「ジョジョの奇妙な冒険」というコミックがある。最近もアニメになってきているようなのでご存じの方も多いと思う。特殊な能力を使うヒーローたちの物語であるが、新しいヒーローが登場する度に作者の想像力の豊かさに驚嘆したものだ。

その1人に、時間を止める能力者がいた。誰しも時間を自由に操りたいと願ったことがあるだろう。飛行機に乗り遅れそう、テスト勉強が間に合わないのとどろきあえず時間を止めたい派から、失敗する以前に戻りたいというやり直し派、将来を見て事前対策を立てたいという欲張り派といろいろだろう。

超能力がない私たち普通の地球人にとって、時間は平等であり、また不可逆であり、そしてそのスピードは一定だ。しかし、主観的にはどうも違う。楽しい語らいの時間は早く、お説教を聞く時間は長い。年齢を重ねると時間の感覚も異なる。小学生のころの1年は長かった。二十歳過ぎたころから、1年をだんだん短く感じるようになった。ある人が、「人は時間を、自分が生きてきた期間に対する割合として認識する」と定義した。うーん難解だ。説明を聞くと、三歳児にとって、1年は人生の3分の1を占めるのに対し、70歳にとっての1年は、人生の70分の1に過ぎない、という。だから、年を重ねると1年が短くなるのだと。わかるような気がする。私の学長の任期はこの1年であり、70分の1の時間は、矢のように過ぎるのであろうが、短くとも誠意を持って全力を尽くしたい。そして、沖縄大学にとっては、永遠の活力を得る年であるよう祈念したい。

2016年 年頭挨拶



理事長 長濱 正弘

新年あけましておめでとうございます。
関係者の皆様には希望に満ちた2016年(丙申)の新春をお迎えることと、心よりお

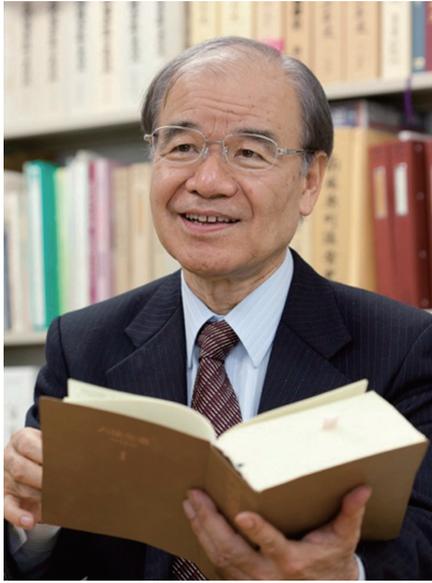
慶び申し上げます。
旧年中は沖縄大学に對しまして御支援、御協力を賜り厚く御礼申し上げます。
昨年は世界的にも、日本国内においても、又この沖縄県に

とつても先の見えない正に混沌とした年だったように思います。その中であつて観光客数の伸びが経済に好影響を与えたのがせめてもの救いでした。
今年「丙申の年」は混沌の世相からようやく陽気に変わり、繁茂し、すくすく成長する年と言われているようです。昨年の混乱から脱出すべく力強く前向きに進んでいきたいものです。
さて沖縄大学は1958年に開学し今年6月10日には58周年を迎えることになりました。

その間大学の使命である、教育、研究、社会貢献を誠実に実行してまいりました。引き続き社会の変革と地域ニーズの把握に努め、大学改革を確実に進め、

将来の地域を担う人材育成に取組む覚悟でございます。
また社会貢献の一環として開催している土曜教養講座は昨年10回(予定11回、1回は台風で中止)実施し通算で530回を数えました。今後もさらに内容を充実させ地域の皆様の御期待に応えるよう努力を重ねてまいります。
2001年にスタートいたしました「冠奨学金」は多くの企業や篤志家また大学教職員の寄付により昨年は26名に支給することができました。更に2014年に創設された宮古八重山地区出身学生を対象とした「冠奨学金」につきましても両地区の企業、後援会支部及び

同窓会支部の御協力を得て、初めて両地区それぞれ3名の出身学生に支給することが叶いました。
御協力頂きました皆様にあためて心から感謝申し上げます。大学を取巻く環境はますます厳しくなっておりますが、役員一丸となり、学生の教育に邁進し、沖縄大学の発展、地域貢献を推進してまいります。
本年が学生はじめ関係者の皆様にとりまして、実り多い年になりますよう心からお祈りいたしますとともに、沖縄大学に對する変わらぬ御支援、御協力を賜りますようお願い申し上げます。新年の御挨拶といたします。



学長 仲地 博

新年おめでとうございませう。年頭にあたり謹んで新年のご挨拶を申し上げます。
昨年沖縄大学は、地

域社会への貢献を評価され文部科学省の私立大学等改革総合支援事業の対象大学に採択されました。沖縄県内の4私立大学で初めてのことで

また、硬式野球部、男子バレー部、女子バスケット部、空手道部などの活躍、教員採用試験に28名の合格、比嘉正人君の小説創作活動など学生諸君の活躍も目立ちました。今沖縄大学は、教育と地域貢献で、小さくともキラリと光る大学であると自負しております。
しかし、地方の小規模私立大学を取り巻く状況は極めて厳しいものがあります。18歳人口の減少、青年の大都市志向などから私立大学の半数近くで定員割れが恒常化しています。沖縄大学は、高い競争率を維持することも文化学科が

ある一方で、法経学科と国際コミュニケーション学科で定員を割りました。両学科とも法学、経済、語学など大学教育の主要な分野であり、本学でも伝統的学科です。このようなか中、社会の需要は何か、高校生はどのような学習を求め、どのような大学教育を期待しているか、大学教育の意義を踏まえながら真剣な検討が行われたのが昨年であり、そして今年はその具体化に向かう年となります。
かつて「復帰」に際して沖縄大学は、存亡の危機に直面しましたが、私学の自立を希求する教員、職員、学生により沖

縄大学の学灯は守られ、多数の人々がここで学び人材となつて羽ばたきました。大学は極めて貴重な地域資源です。先人たちの苦勞に思いを馳せ、沖縄大学の存続と発展に向け汗をかかす年でありたいと思ひます。
新しい年が、沖縄大学の100年に向けて大きな一歩となる年であるよう祈念するとともに、学生、教職員、同窓会、後援会(ご父母)そして沖縄大学が立地する那覇市並びに沖縄県などすべての関係者のご支援とご参加をお願いいたします。年頭のご挨拶といたします。

宮古・八重山奨学金、今年度6名へ授与

本学はこの度、「宮古・八重山地区有志会沖大奨学金」を創設しました。宮古・八重山の企業・個人の皆様に広くご寄附を募り、同地区出身学生の経済的支援にあてて学業を奨励することが目的です。

今回、本学の長濱理事長と後援会の嘉数昇明会長が父母懇談会等の機会に宮古・八重山地区へお伺いしました。

初めての取り組みでしたが、宮古地区では8社18名の企業・



個人の皆様より50万3千円、八重山地区では3社の企業・団体の皆様より19万5千円のご寄附を賜り、それぞれの地区で3名ずつの学生を支援することができました。

現在、本学には53名の宮古出身の学生と、42名の八重山出身の学生が日々学業に励んでおります。離島ゆえの経済的負担を強いられている学生へ奨学金を支給するべく、募金活動は継続中です。

一社3万5千円、一個人1万円のご寄附を募り、学生一人につき授業料半期分相当の35万円の支給を目標としています。

(経営企画室 谷みなみ)

2015年度 父母懇談会

学生支援課の3大イベントである「父母懇談会」「沖大祭」「新入生歓迎スポーツ大会」その内のひとつである「父母懇談会」が、9月に県内6会場で開催されました。

9月2日(水)の北部地区を皮切りに、4日(金)久米島地区、8日(火)中部地区、11日(金)宮古地区、12日(土)八重山地区、19日(土)那覇・南部地区の6地区で

開催されました。各地区とも面談会終了後には懇親会を催し、ご父母、後援会、同窓会、教職員との交流会が賑やかに行われました。

ご父母の参加者数は、北部地区35名、久米島地区4名、中部地区49名、宮古地区37名、八重山地区27名、那覇・南部地区は109名で、全体で261名のご参加がありました。

面談会では、ご父母の皆様と教職員が学生の修学状況や課外活動、家庭での過ごし方など、お互い普段目にすることができない情報を伝え、意見交換等を行いました。ご父母の皆様からは、学生支援のヒントを頂くことができ、充実した面談会となりました。



した。また、面談会終了後の懇親会では、ご父母と教職員だけでなく、後援会、同窓会と幅広く交流を行うことができました。

私は学生支援課へ昨年7月に異動し、初めて父母懇談会の全会場に参加したのですが、特に印象に残っているのが、久米島地区、宮古地区、八重山地区です。離島地区での父母懇談会は、ほぼ毎回同じ教職員が参加するため、顔なじみのご父母が多く、とても親近感があり、和気藹々とした雰囲気になります。離島

2015年度

外部評価委員会開催

本学の中長期経営計画を中心に教育研究活動及び管理運営について外部有識者の意見を聴取する外部評価委員会が、今年度は12月17日に開かれました。

仲地学長、盛口教務部長等から、大学基準協会の大学評価結果に対する内部質保証の取り組みや第4次中長期経営計画の実施状況を説明し、各委員から貴重なご意見を頂きました。

魅力ある授業づくり、学生の就職活動、社会が沖大に求める大学像、社会人を対象にした履修プログラム、海外大学との交流、学部・学科の諸改革案への期待等様々な助言を、今後の大学運営に活かしていきます。



地区では、面談会・懇親会終了後に、後援会・同窓会主催の2次会が催され、宴会は夜遅くまで盛り上がり、ご父母の皆様とさらに交流を深めることができました。

後援会、同窓会及び大学関係者の皆様には、毎年父母懇談会に多大なるご尽力を賜り、感謝申し上げます。来年度もより良い学生支援のため、父母懇談会へのご協力をよろしくお願い申し上げます。

(学生支援課 比嘉良彰)



秋のすがすがしい青空のもと、
学生の創る最大のイベント、
沖大祭が開催されました。

2015年10月31日から2日間、奇跡的に晴天に恵まれた。「奇跡的」というのは、毎年沖大祭は雨に見舞われ、数年前には台風と重なり、延期を余儀なくされるという事態になったほど。まさに「風を呼ぶ学祭」でした。しかし、今年には沖大祭実行委員のがんばりが天に届いたのか、気持ちのいい秋晴れのもと、沖大祭当日を迎えました。

さて、第56回目の沖大祭は「一歩先へ、Do you have a Dream?」のテーマのもと、たくさんの学生や地域の人々が訪れ、大成功をおさめました。ひとえに参加者や出店団体・ステージ出演者の多大なご協力のおかげです。ありがとうございます。そしてその成功を裏から支えたのが、沖大祭実行委員の学生でした。ここで彼らの苦難と成長を少しだけ紹介させていただきます。

実行委員は準備の過程において、様々な場面で「社会との関わりが出てきました。ステージ業者との打ち合わせ、企業とのアポイントメント取りや出演アーティストとのやりとりなど、いわゆる「大人」との関わりがいろいろな場面で発生します。初めは、面会の時間に遅刻したり、大事な報告の期限が守れなかったりと大変な迷惑を相手にかけてしまいました。しかし幸いなことに、誰もそんな実行委員をとがめることはなく、それどころか温かく応援してくれました。とてもありがたいことだと思えます。実行委員は失敗を繰り返し、戸惑いながらも、その応援に応えるかのように、日々成長し、顔つきもだんだんたくましくなってきました。彼らは学祭に関わるいろんな方との交流を通して、人の温かさや繋がり、そして相手の気持ちを考えることの大切さを学んだのではないかと思います。

学祭当日までの数日間、ほぼ徹夜で準備にあたり、疲れもピークに達した実行委員でしたが、学祭が終了した時の彼らの顔はとても満足げで、安堵の笑顔がこぼれていました。訪れた来場客の楽しむ姿が、彼らの一番のご褒美だったと思います。実行委員の皆さん、本当にお疲れ様でした。私はあなた達と出会い、一緒に悩み、共に成長できたことをとても誇りに思います。来年もさらに盛り上がる沖大祭と一緒に創りあげていきましょう。

（学生支援課 金城慎介）

硬式野球部

第94回 九州地区大学野球選手権大会 決勝トーナメント優勝



5月(春)の沖縄大会に続き、2季連続で決勝進出を果たし、1977年以来、38年(77季)ぶり3回目の優勝を果たすことができました。このチームは前回の悔しい逆転負けによる準優勝から再スタートを切り、主将の仲村進助(健スポ3年)を先頭に、そしてチームのキャッチフレーズ「ゼロからの挑戦～イメージを実現に～」を掲げ、学生の自発的取り組みを念頭においた運営強化を図って参りました。

惜しくも、全国大会出場を争う、九州全土決戦では、九州国際大学(九州六大学野球連盟代表)に延長17回という激闘を繰り広げながらも2対1で惜敗し、またしても全国大会出場の実現は逃しました。しかし、学生は、このような大舞台にも全く動じず、持つ力を十分に発揮し、素晴らしい試合運びをしてくれました。

チームは、まだ道半ばです。来年こそは!の気持ちで、目標実現に向けて、学生と共に邁進して参りますので、変わらぬご支援とご協力の程どうぞよろしくお願い申し上げます。

最後になりますが、今大会に限らず、平素より大学ならびに保護者、OB等各方面の皆様には大変温かいご支援を頂いており、誠に感謝に堪えません。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

監督 大城貴之



夏休みにはCMづくりの力を入れ、10月からの店舗販売でもユニークなパフォーマンスで多くのお客様の注目を集めました。そして今年「ベストパフォーマンス賞」を見事受賞しました!

7月に始まった商品コンセプトのアイデア出しから、プレゼン、試作を重ね、沖大チームはスペイン料理のアヒージョとメキシコ料理のトルティージャを融合させた「トルチキン」を開発。サラリーマンが仕事の合間に、コーヒー片手に手軽に食べることができるといったのが商品のコンセプトです。

「学P」とは、県内「ファミマ」で販売する商品の開発から販売促進までを体験する、沖縄ファミリーマートの実戦型インターンシップ。9年目の今回、県内7大学が商品開発にチャレンジし、本学からは8名が参加しました。

「学P」リーグにて
ベストパフォーマンス賞



職員インタビュー

横山 正見さん

学生支援課障がい学生支援コーディネーター
非常勤講師（障がい原論）

沖大生の頃から障がい学生支援に関わってきた横山正見さんが、障がい学生支援コーディネーターを離任することになりました。これまでの取り組みを振り返ってもらいます。

（聞き手）金城 慎介 学生支援課職員

— いろいろ吸収しておきたいので、今日はいい機会を頂きました。

障がい学生支援コーディネーター（以下、CN）として関わることになったのは2013年からなので、それほど長くはないですね。ただ、沖大には2005年に編入学で来ているので、学生で2年、その後特色GP（ノートテイクから広がる大学づくり）での3年を含めると、障がい学生支援に10年関わってきたことになります。

— 学生の時の関わりとは？

支援学生として学内のノートテイクが中心だったけど、当時僕らがやっていたのはそれだけではなくて、もつと社会的な意味があると思っていたから、サークルで地域の講演会の情報保障や字幕をつけに行ったりもしてたね。聞こえない人だけではなくて、例えば高齢で耳が遠い人にもいい場が創れるなど、やりがいがあったね。

— 障がい福祉に関わるようになったのは？

沖大に来てからだけど、やはり出会いだと思っただよ。聞こえない友達に出会って、彼と一緒に行動する中で自分も気づかされていくことがあるわけで、自分の役割も出てくるし、それをやっていくとどんどん自分の世界が広がるんだよね。だから、誰かのために

というのがどこかにあったかもしれないけど、単純に自分が楽しかったり、やりがいを見つけたというのが一番大きい。

僕は卒論で聴覚障がい学生のライフヒストリーをテーマにしたんだけど、話を聞いていくと、経験の質が全然違うんだよね。自分は学校を楽しいと思っていたけど、聴覚障がいの人で楽しいと言っている人はほとんどいない。これはショックだったよ。個人の問題じゃないんだよね、社会の問題だと感じたよ。

— CNとしても、やりがいとは？

CNになると直接の支援者ではないから立場は変わるんだけど、大学の中でいろんなことをやっていく中で、みんな力を付けていくんだよね。聴覚障がい学生がどんどん成長していく姿は、CNになつてからはやりがいだったし、2年前に卒業生の平良さんがCNとして採用されたのはすごい嬉しかったな。いままで、たぶんね、聞こえない学生の多くはCNをやりたいと思っていたと思うよ。だけど、できなかったんだよね。それはまだ歴史が足りなかったというところもあるし、当事者も育ちきれなかったということもあるし、大学も雇いきれなかったと思うんだよね。だけど、それができたというのは本当に大きいことだなと

思ったね。

特色GPの申請書を書く時、成果をどのように出すかということ、僕はね、大学の中に障がいのある人がいるのが当たり前の光景になることって書いたんだよね。あれから8年経って、そうなったからね。あの時はまだそんなに多くなかったけど、今は当たり前のように大学の中にいるからね。こうなるにはやっぱり10年くらいの時間は必要なんだね。

— 車いすの学生も沖大祭に関わってくれるようになったし、いろんなものを乗り越えて学生が活躍している姿を間近で見えています。

大学の中にいるっていうことは、そういうことなんだよね。別に福祉の対象者としていっているわけではないから、一人の構成員としていっているわけだから、その人がサークルで活躍したり、ゼミで活躍したり、大学祭の企画者になったりというのは、当たり前なことなんだよね。その当たり前がようやくよく当たり前になったっていうのは、あまり気づかないんだけど、ちょっと振り返ってみると、これってすごい価値だなと思うよ。

— CNをやっている、難しくかったことは？

難しいなと思ったのは、介入の仕方ね。これはソーシャルワークでも難しい問題と思うけど、どこ

まで当事者でやるか、どこから僕らが介入するか。特にトラブルの時ね。トラブルも考えようによっては問題に気づきつけかけになるんだよね。それをみんなで解決していくというのが重要だけど、でもそのまま放置しておいて、例えばハラスメントにつながるようなことがあったりとか、障がい学生が不利益になるような状況とか、そういうのがあったらやっぱり大学として問題だからね。だからその見極めというのは難しいなと思ったし、日常的な友達関係では対等だと思っただけど、支援関係の中では、する人とされる人という関係を内包するから、お互い役割を背負うんだよね。だから、そこは注意して見ていなければと思っていた。

— それはすごく難しく、僕らがどう指導していったらいいのかなって。

指導しようと思っただけから、まずは障がいの勉強をするべきだね。支援というのは、障がいによるできないことに対してその支援が合理的であるかの判断だから障がいについて知っていないと、不利益な状況を放置したり、必要のない支援を行ったりというのが。それはCNとしては知らなきゃいけないことだよ。だけど、障がいって多様だからね、

だから本人としっかりコミュニケーション取れるかが重要じゃないかな。そういう意味でも、個別の関係をしっかりと作ることね。その後、全体の関係がしっかりと作れること。それができないといけないなと思ってたから、定例会や勉強会という機会を大切にしていたかな。

— 僕もそれが大事と思ってます。

難しいことを言ったけど、基本は、人は楽しいところが集まるので。後は、やってたら学生もいろんなことをやりたくなるから、その面白いアイデアをどうやって実現するか、そこで大学との調整役になるのが僕らの役割なんだよね。学生がやる気になるのはね、自分がやっていることで何かが変わっていか、何かが作られていくという実感ね。積み上がったいく実感が得られるとすごくやる気になる。学生からいろんな意見があつたり、いろんな動きが出てきた時に、これは大切だなとか、何が大切かを感じる力がないとCNとして難しいし、実際に学生とコミュニケーションを取ってないとそれはなかなかつかめないんじゃないかな。例えば、定期的に集まる場があるといい、手話を広めたい、車いすの扱い方を知ってほしい、合宿をやりたい、他大学と勉強会をしたい、全国の大学の状況を知りたい、とかアイデア

がどんどん出てくるのね。

なんでもそうだと思うけど、困ったことがあると、どうしても固くなっちゃうの。固くなっちゃうと、もっと固くなっちゃうの。だから問題が起きないようにルールを作るのも重要なんだけど、ルールって、人にこちらが望むように動いてもらいたいから作るんだよね。だけど、その前にまず人が動く基礎のところがないと。それは、今の日本の障がい学生支援にも通じるところがあると思ってるよ。いま、組織整備とかどんなに進んでるんだよね。これは素晴らしいことだと思うんだけど、でも一方で、もっとみんなが楽しく生き生きやるとか、ゆつくりやるとか、そういうのがないとどんな制度ばかりになっちゃうし、そういうところは沖大から発信できると思っただけ。

— 障害者差別解消法が4月から始まりです。

沖大は人でやってきたから、そこはすごく大事になるところなんだけど。障害者差別解消法で求められるのはまさに組織体制の整備なんだよね。国立大学協会の「対応要領」を読むとね、組織体制のことも参考になるよ。何を言っているかという、学内で誰が責任者であって、その下に誰がいて、現場も分かりつつ組織のことも分かる中間にいる「監督者」に研修

をとというのがあつたりとか、支援の依頼を受けた時に、どのようなルートで対応し、合理的配慮の決定をしていくかとかね。今まで僕らはこれまでの経験で判断してきたけど、それを制度化することが求められているんだよね。それが相談体制の整備。もう一つ大切なのは、紛争の防止と解決。障がい学生支援に関わっていたら感じていると思うけど、やっぱりコミュニケーション方法や移動方法が違つたりしたら、すれ違いが起りやすいんだよね。支援への不満とか必ずあるわけで、それをどう改善に生かしていけるのかという体制を作る必要があるんだよね。だから不満や苦情を聞くのはやっぱり辛いけど、そこに何か大切なヒントがあると思うんだよね。でもそれを支援をする役割のCNが全部受けると、結構きついと思う。だからいくつかの苦情を受けて対応する体制整備も求められているよ。

— CNや職員みんなでそういう学生の意見を聞いて解決へ導いていく体制ですね。

法律的にはどんどん進んでいるんだけど、それともにもうちよつとスローダウンするのがあると思うよ。やっぱり障がいがある人と一緒にやるっていうのは、障がいの無い人たちがベースを落とすということも僕は必要だと思

うんだよね。移動にしてもコミュニケーションにしても時間や工夫が必要だよ。そういうことをやっていかなければいけないから、制度を整えたらOKではなくて、制度プラス自分達のやり方ももう少し見直すっていうことだろうね。一緒にやっていくっていうことは。

— 法の整備に対して、障がいのある方々はどう見えていますか？

非常に期待を持って見ているよ。だって今までは「特別」なサポートだったんだよね。大学によってはやるというように、大学の裁量に任されていたんだけど、法律ができるということは大学の判断ではなくて、法的な判断でやらなければならぬとなつたんだよね。だけど、制度が出来たけど漏れることつてあるから、そこもいくつか見ていかなければと思うけどね。

— 当事者にとっては、大学がそういう努力をすることで、行きやすい大学も増えてくるだろうし、選択肢の幅も広がるし、うれしいことだろうなと思いますね。

大学が制度を整えたら、他の教育機関とか仕事の分野にも広がっていくからね。やはり大学が一番先に社会の変化を作り出していきゃならないかな。

— 障がい学生支援について思う

ことは？

もともと沖大は、マイノリティへの取り組みや社会問題への発信を積極的に行ってきたから、障がい学生支援についても素地があったと思うよ。大学としての基本的な姿勢があると様々な問題への取り組みや、学生の受け入れに柔軟に対応できるというのがあつたと思う。どんな活動もそうだと思うけど、対象となる人がいて、だれどその活動は対象の人を超えてつながつていくんだよね。障がい学生のためにやっていることが、じつは一般学生のためでもあつたり、大学を変えていったり、社会に新しい価値を提供できたりとか。でも、「障がい学生のためだけ」つてなっちゃうと、狭くなっちゃうのね。だからそう考えていくと、相手のためにやっていたことが自分のためになっていたりとか、つながつていくし、でもそれに気づくには、やっぱりマイノリティの視点から見た方が世の中は気づくことが多いと思うよ。

— マイノリティの視点ですか。

障がいのある人が一人だけで困っているも、みんな分らないじゃない。だけど、近くにいたら気付くんだよね。それを覚えていこうっていうのが見えるじゃない。問題意識が自分の中につくられたりとか。立ち位置っていうのがあ

と思うんだよね。

「身近にいる人への支援を通して、社会が変わっていく？」

社会が見える、というのかな。

「僕もそれを感じたいし、学生にも感じてほしいんですけど。」

それはね、個人的な経験をたくさん聞くのが僕のやり方ね。ただ聞いてるだけでなくて、その時に気づく力もないと駄目だからね。それから具体的なアクションにならなくていく時は、学生と一緒にやらないと、だと思ふ。その中で当事者も大学も鍛えられていくから僕らもハッと気付かされることが多いし、障がい学生も問題点をしっかり言えるようになるとかね。障がい学生であれば問題点を分かっているかといえば、そうでもないからね。そうなってくると、障がい学生の先輩とか、社会で活躍している人とか、そういう所とのつながりも重要になるんじゃないかな。

「一番印象に残っている学生は？」

やっぱり、田中息吹さんですね。僕に聞こえない世界の入り口を与えてくれたので。彼自身もどんどん大きくなっていったし。

(2015年12月18日)

卒業生インタビュー

田中 息吹さん (福祉文化学科2007年度卒)

ノートテイクサークルの仲間と卒業時に学長特別賞を表彰された田中息吹さん。

11月、授業「障がい原論」のゲストスピーカーで来学した機会に、話を聞きました。田中さんのもう一つの顔を見た思いがします。



平仲ボクシングスクールジムにて (2015年11月4日)

「障がい原論」ではボクシングの話は少しかけましたね。

ボクシングは障がいのこととは違うので。今まで周りにあまり話してこなかったのですが、今だったら、伝わるように話せるかもしれません。

「ボクシングはいつ頃から？」

中学の時、母の勧めでフィットネススクラブのジムに2年くらい通ったことがありました。町田市の和光高校に進学しましたが、1か月で中退です。ジムにも行かなくなりましたが、その夏に、障がい者・健常者が一緒に歩いて鉄道駅のバリアフリーを調査する「日韓TRY2001」に参加して、夜は一人で練習していたので、やはりボクシングをやりたいかつたんですね。その頃、モハメド・アリが僕の中の大きな存在でした。

翌年参加した、障がい者と自転車で日本一周するイベントの最中に、仲間パンチの打ち方を教えたり、福岡では野宿しながらジムに通ったことがありました。2週間ですけど、鬼塚元世界チャンピオンのジムです。鬼塚がボクシング雑誌に書いた連載コラムを読んで、ボクシングを通して生き方、精神的なものにつながる感じがします。

「モハメド・アリ。」

ボクシングとは別のことでですけど、アリには僕と通じるものがあると感じていました。黒人と障がい者というところで、黒人が下と言われている中で、アリが出てきました。

スポーツ選手という枠を超えて、自分の主張を貫き通したことのインパクトは大きかったです。世界チャンピオンの資格を剥奪されても反戦を主張し徴兵を拒否し続けたり、黒人公民権運動にも関わったのですが、なにより僕は、アリが黒人なのに「自分は美しい」と言ったことに衝撃を受けました。その言葉が凄く、そういう姿勢も凄く。アリの生き方に感動していました。

「鬼塚。」

鬼塚は精神的なこと。ボクシングに限らず、すべてに言えること、生き方にも通じることを教わるような気持ちでコラムを読みました。何回も読みました。

この2人がやっていったボクシングを改めてやりたいというのが、僕のボクシングの出発点です。

「本格的に始めたのは？」

沖大に入って、平仲ボクシン

グジムに通いました。

「平仲ジムを選んだのは？」

沖繩のボクサーは強い。世界チャンピオンが5人も出ている沖繩に興味があったんです。それで、沖大と沖国大の近くにそれぞれジムがあるのが分かったもので、どちらかに通いたいと思いました。両方の大学を受験して、「授業を学ぶためにはノートテイクが必要ですよ」と面接で伝え、「準備をする」と言ってくれた沖大に入学しました。面接は加藤彰彦先生でした。

「さっそく平仲ジムに？」

いえ、20歳になるまで、走っていました。漫湖公園から那覇空港の方をぐるっと。未成年だと、ジムに入るのに親の同意書が必要だったので。プロになれるかわからない状況では、自分だけの問題だったし、1年ランニングで下地を作ろうと。

「プロになる、とまで言わなくても。」

それは考えなかったです。やるからにはプロになりたいと思ってましたから。でも、頭蓋骨に埋め込んだ人工内耳のこともあるし、聴覚障害者ボクサーのTVDキムメンタリーで、プロになれないことは知っていました。

—20歳になるのを待って、ジムに入った。

でも、「プロボクサーになりたい」とは言えませんでした。どうしたらプロになれるのか分からず、練習で見込まれればジムから声をかけられることもあるかもしれないと。

—ジムではどのようなトレーニングを？

大学の空き時間に行けるようにしていました。ノートテイクの活動や沖縄難聴者協会の活動で調整できない日もありました。でも、僕はフィットネスをしに来ていると思われていたと思います。ジムの人が、僕がプロボクサー志望ということを知らなかった。だから基礎ばかりの自主トレーニングをしていました。

—沖大を卒業してからは。

依然としてプロになれる道が見えず、ボクシングに一本化するができなかったので、障がい者の活動を続けながらボクシングも続けるという2つの顔を持ちながらやっていたことにしました。

西宮市にある聴覚障害者自立生活センターで働きながら、職場に近いジムに通いました。

入会申込書にプロボクサー志望かどうか記入する欄があったので、今度はプロ志望と記入した。何か変わるかなと思ってたんですけど、プロになりたいからといって、今日の何かが変わるということはない。縄跳び、シャドー、ミット、サンドバッグを叩いて、あとはスパarringするかどうか。入会申込書にマルを付けただけで、伝わっていないと思いました。

—それで、どうしましたか？

仕事をしながら4年通いました。通い始めてから1年経って、もう一度「プロになりたい」と言ったら、「ボクシング協会に確認する」と、そんなことだったと思うんです。でも、待ついても返事がなかった。自分でも聴覚障害者は日本でボクサーになれないことを知っていたので、規則は変わらないのだからと理解しました。ずっと挫折しながら続けてきたんですけど、やはり生きていくうちに続けたい。その時25歳で、このままではボクシングできないまま30歳になってしまうという危機感を持ちました。

—日本を離れた。

セブ島に、ミラン・メリンドという強いボクサーがいて、そ

の人のジムに行きました。ミランがいました。ジムはプロとアマに分かれていて、僕はアマチュアの人達と練習していたんですが、突然、ミランが僕に話しかけてくれたことがありません。もっとスピードが必要だとか言われたんですけど、感動したのは「自分は強いと自分を信じてることだ」と。ミランはプロ世界ランカーの一人ですが、試合のない時は、キッズボクサーの面倒を見たりしていて、そんな彼なので、ふと、僕にもアドバイスをくれました。

—息吹がやりたいボクシングと、強いボクサーと闘いたい。

—なぜ、強い人と闘いたい？

リングで闘う独特の緊張感、生きてる感じがします。普通の仕事をして、家に帰り、家族と接し、ご飯食べて、というのは、それはそれで大変で意味のあることだと思っんです。やっぱ僕は強いボクサーと闘いたい。食事を削り、トレーニングで自分を追い込んで、そうやって強い相手にぶつかる。この経験はまだ多くありませんが、その瞬間は至福だと思います。

—試合は何回くらいやりましたか？

フィリピンではアマチュアで10戦して、4勝6敗。今いるタイでは3戦して、3敗です。

—どうしてタイへ？

僕はもう30歳なので。フィリピンのジムに入った時、1年したらプロになれると言われていた。でも、僕がセブ・スタイルに散髪した時、人工内耳の手術痕が出てきて、傷があるけど大丈夫なのかって言われてしまい、そのことでプロになれるという話が難しくなりました。次に行ったメキシコでは、30歳までにプロボクサーにならないと間に合わないって言われました。その時点で残り数ヶ月でした。だからメキシコはあきらめて、タイへ。タイでは年齢制限がないんです。

—タイでプロになった。

プロボクサーになれるかどうか分からない状態では、自分が何のために練習しているのか、何のために走っているのか、精神的に苦しい時もありました。今はプロボクサーになって、闘うという目標があります。試合が決まったとなったら、その相手に勝つことだけを考えて練習できます。

障がい者運動は、自分が元々持っている欲求、自分の根源の中から出てくる「やりたい」というものではないので、だから違うんです。自分の中から本気でやりたいと思うのが、ボクシングなんです。強い人と闘って、ぶつかりたいと、本気で強く思うことができます。

—これまでの夢が実現した。

実現。実現するためのスタートを切ったところです。あとは、本当に強い人と闘えるかどうか。僕はいつまでボクシングができるか分からない。でも、とにかく自分がボクシングできるうちに、ボクシングに自分をかけてぶつかることができるなら、今はそのための努力をしたい。僕は、ボクシングに対して、だったら、実現できる、できないは置いておいて、人生をかけて挑戦したいと思っています。それが一番です。

(2015年11月4日、6日)



学生インタビュー

石橋 由季子さん 国際コミュニケーション学科4年

沖大で学ぶ学生の、休学・復学のエピソードを
一つ紹介したいと思います。



― 県外から沖縄へ。

家族旅行で沖縄に来たことがあつて、離島のきれいな海とか、自然とか、この暖かい感じとか、すごくいいなと。いつか沖縄に住みたいなとぼんやり思っていて、それで進学を機に来ましたね。

― 両親はなんと？

「行ってきなさい」って感じですね。うちは自由にやらせてもらってます。

― 学生生活はどんなふうになつた？

沖縄に来たからには、エイサー部に入りました。私、地域の踊りとか民族衣装とかも好きで、入学式の後のサークル紹介でエイサーを見た時に、カッコイイと思って、これはやるしかないよ。エイサーを見てたらわくわくしますね。全島エイサーとか見に行ってもずっと興奮しますもん。太鼓の音もイイし、地方の声もカッコイイ。Jポップ？ 普通に聞きますよ(笑)。

― 授業の方は？

沖縄自体に興味があつたので、文化にしても歴史にしても料理にしても面白いので、沖縄関係の授業はなるべく取りましたね。副専攻の「沖縄学」を取りたいと思っていたので。

― 好きな所に住んで。

そうですね、幸せなんです。

― 卒論のテーマは？

「持続可能な生活」というテーマです。

― それをテーマにしたのは？

沖縄で生活をしたのが大きいかもしれません。東日本大震災があつて、エイサー部で夏休みに福島県いわき市へ2年続けて行かせてもらえたことも。もう一つはインドで勉強して、私が経験したインドと今住んでいる沖縄を見て、「持続可能な生活」って何かを考えて、それに向けて自分達のできることを提案してみたくなつたんです。

― インドでの経験？

インドそのものに引かれていたのと、プラス「持続可能な有機農業と農村開発」を学べるコースがあつたので、4年次に進む前に2年間休学して、去年1年間留学してきました。

― どんなきっかけが？

インドに行くことになつたのは、長い経過の中だと思えます。いつ何があつたかということではなくて、沖縄で生活をして、いろんな人と出会って、いろんなことをやってきた過程で考えてい

くようになったというか。2、3年生の時は桜井先生のゼミでものを考えるようになりました。でも大きかつたのは、毛利さん達とオスプレイ配備反対の沖大生の運動みたいなのをやっていて、みんなでいろんな話をする中で、どんな社会を創っていくことが自分達にとつてもいいのかなというのを考え始めて。そこから「持続可能」というのに繋がつて。

― もう少し、詳しく。

毛利さんご存知ですよ。毛利さんと出会つたのが2年生の時なので、その頃から一緒にくっついて辺野古に行つたり、そういう勉強会に行つてみたり。元々沖縄戦や米軍基地の問題に興味があつて、沖縄に行くからにはそういう勉強できるといいねという話はして沖縄に来たので、関連する講義は興味を持って取つてました。

毛利さんとはかぶる授業が多くて、毛利さんは毎回授業で質問する人だったので、凄いなと思つて。この人はずっと勉強してきてるんだなというのが分かる質問でした。そうしたらいつの間にか声をかけてもらえるようになつて、辺野古に一緒に行こうとか誘われるようになりました。毛利さんの凄いところ？ 退職し

て大学に来ること事態が凄く、しかも埼玉から。しかも自転車を通つてるんですよ、60代が。むっちゃ体つきもイイし、常に笑顔だし。年の差とかを感じさせる人じゃなく、同じ立場で関わつてくれるし。どんなしたら、こんな人になれるんだらうって思いましたね。

― 人に影響を受けたり、現場へ行ってみたい。

そういうことがありながら「持続可能」というテーマが見えてきたんですかね。

― インドでは、農業の勉強を？

幅広くやりました。それこそ有機農業や、農村開発に関する座学もやつたし、養鶏、養豚、養殖、食品加工、販売なども学びました。

― 1日をどのように？

朝6時から8時くらいまで農作業をして、朝食。9時から授業。昼食の後は1時から5時まで授業。その後はフリータイムで7時から夕食。毎日こんなでした。土曜日は午前中授業で、午後は食材の買い出し。これもマーケットの勉強。3人のインド人学生とネパール、ミャンマー、日本人のスタッフと共同生活をしながらでした。

JICAと連携しているんな



ことをやっている所でもあったので、農村女性たちの母子保健に関することや、農家さんたちと作った組合で有機の野菜や米を使った食品加工の体験もしました。

―盛りだくさんですね。

農業をすること、農村開発を考えるとということなんですけど。英語で詰め込まれすぎて、毎回課題も出されて、それをやるのに必至で。一度教えてもらったけど、ちゃんと理解するには自分でもう一度振り返ってやらないと入ってこないなと思って、それも今の「勉強したい」に繋がったと思います。

―「勉強したい」に繋がった。

インドで勉強していることを振り返りたいと思つたし、それをどんなふうに繋げていけるかな

ということも考えたいなと思ってたし。そう、最後に「今後の自分について」という卒業課題がありました。それには、沖縄にいていつか人が集まる場所を創りたいって書きましたね。石鹸作りや天然の染色とかも習ったので、そういうモノづくりとか、野菜を育てたりしながら人が集まる場所を創りたいと。普段考えないようなことを皆で考えてみたりしながら。

―ところで、インドが初めての海外？

高校の時にオーストラリアで短期のホームステイをしたり、東京のNGOがフィリピンでやっていたプログラムに参加したり。あと、中学2年生くらいの頃、1か月半ほどイギリスに行ったのかな。

―夏休みに？

いや、中学生の時学校行ってなかったんですよ、私。不登校だったから、時間があつたので。

―・・・

中学の時は何があれだったのかなあ。なんか、気持ち悪かったですね、学校が。そもそも納得がいかないことには縛られたくないので、同じ制服着て、靴下まで同じ色で同じ長さ、髪の高さまで

言われたりするのが駄目だったし、先生達のそういう細かい所を気にして、ちゃんと生徒を見てくれないところも嫌だったし。中学生の時って集団になりたがるのでそういう中にも属せなかったし、そういう周りのどこかに属さないって生きていけない必死な感じとかも気持ち悪かったし、なかなか気持ち悪いよここ、と思って行かなかつたですね。

―高校では不登校しなかつたんですか。

高校は、無遅刻無欠席でした。北海道へ行ったんですよ、私。不登校とか非行の子達を全国から集めている私立の学校があつて。今から思えばそこもすごく面白い場所、鍛えられましたね。

―なんか、すごそうですね。

真正面から生徒と向き合ってくれる学校で、すごくいい先生達に出会いましたね。一番影響を受けたのは担任なんですけど、「自身と向き合う」ってことを教えてもらえた学校で、「学校」に対して持っていた不信感を「信じられる場所」に変えてくれました。

高校のそばにその高校の元先生がいて、こんな先生になれるんだったらいいなと尊敬しているんですけど、その人が教えてくれたのは、教育にはいろいろな漢字

があるよって。共に学ぶ共育とか、響き合う響育とか、あと狂った狂育と、協力し合う協育って。1年生のしんどかった時とかはしょっちゅう行って、お話しいろいろ聞かせてもらって。今も、その高校の近くで青少年の自立支援の施設をやっています。

―いろいろな人に助けてもらって、やっとなんか感じてましたね。この高校に出会えたというのは、教育への見方がすごく広がったと思います。

―そういう背景をもって、沖縄へ。

そうかもしれないですね。うちの親は、本当に応援してくる人なので。

―沖大で4年目に休学を？

自分がしんどくなつたんですね。ずっと悩んでましたね。自分が何をしたいのかも分からず、それでそのまま卒業していくんだって思ったら、それはダメだと思つて。だから一回離れてみようよ。

―今は解決してますか？

今は大丈夫ですね。大学に戻ろうと思つたので。初めは1年の約束で休学したんですけど、1年休学しても大学に戻りたいとは思わなくて、戻りたいと

思つてないまま戻ったら同じだな。それでインドへ行つている間に、ああ勉強できるって楽しいな。なんか知らないけど、勉強したいって思つたんです。いろいろ勉強していて、知らないことがいっぱいあると思つて。きつと、いろんなこと知りたいと思つたんですね、私。それで大学戻つたらずっと勉強できると思つて、ああ、戻ろうって思つたんですね。勉強に集中できるので、すごい幸せだなって。それで、やっとなる気になつたので、戻れたので、良かったと思つてます。

―図書館でよく見かけます。

今、必死ですね。英語の教職関係もあれば、日本語教員の勉強もあるし、自分の生活もあるし。卒業単位残り2つで休学したので、単位は余裕ですけど。

大学に戻るという選択をした時、ただ単に卒業するために1教科だけ取つてあとは好きにするのか、それともガッツリ大学に行つて、教職だったり、何だつたりをやり終えて、卒業するかという選択をインドにしている間、考えて、結局、始めたからにはやらんと終われんと思つて、ガッツリ大学に来る方を選びました。今も、目いっぱい授業取ってます。(2015年12月8日)

学生インタビュー

中国語を学んで

昨年11月、那覇市JTA本社で2015年JAL中国語スピーチコンテスト沖縄大会が開催されました。このコンテストは、日本と台湾の青少年による民間交流を深めることを目的に、日本航空株式会社と日華青少年交流協会が20年以上にわたって開催しています。今年の沖縄大会には県内から12名の学生が参加し、本学の北川穂乃香さんは準優勝、佐次田光さんは特別賞を受賞。東門春夏さん、島袋るきさんも健闘しましたが、入賞まであと一歩でした。4名はともに国際コミュニケーション学科の2年次です。

今回、初出場ながら見事第2位という成績を収めた北川穂乃香さんと昨年台湾留学を終えた北川皐月さん姉妹に中国語を学習する想いを聞きました。



国際コミュニケーション学科2年

北川 穂乃香さん

(陽明高校出身)

—中国語を頑張っているようで。基本的な資格は頑張っているようにしていますが、入学式の歓迎スピーチで中国語で話したり、歌ったりということも担当させていただきました。

中国語と私
近いようで遠い

金曜日には言語交換の集まりがあつて、留学生とコミュニケーションを取るのには言葉の勉強になりますし、友達との輪も広がります。

—スピーチコンテストに挑戦を?

王先生の中国語の授業で紹介があり、4人で挑戦しました。私は台湾へ留学をしたかったのでアピルポイントになると思ったのと、学生生活の一つの経験になると思つて参加しました。

スピーチの内容は、高校生の時に初めて経験した中国旅行で、言葉が分からない中でちよつと怖いと感じた中国人の行動が、大学に入って留学生と交流を持つことで、そういう「怖い」じゃなくてとい

うふうに私の考えが変わつてきた。だから見かけで判断してはいけないという内容だったんですけど。

—どのような評価を受けたと?

コンテストに挑むまでに、先生方に特訓していただきました。中国語は発音を正確に言わないと伝わらないので、王先生にも厳しく指導して頂いています。練習の中で発音に関する指摘がどんどん少なくなつていったので、やはり発音が評価されたと思います。身振り手振りの表現力とか、笑顔でとか、そういう細かい指摘も体に染みついてきたと思います。

—どれくらい練習を?

夏休み前に募集があり、出場したい人はスピーチ原稿を出すようにと言われました。図書館のライティングセンターに協力していただいて原稿を完成させ、それから夏休みの間はひたすら暗記をしました。10月から王先生の指導が本格的に入ったんですけど、暗記をした甲斐があつて発音に集中して練習することが出来ました。私たち4人は、週1度のペースで王先生に個人練習をつけていたんで、そこで徹底的に、もうひたすら読みました。

—ところで原稿作りはスムーズに?

はじめ、何を書いたらいいのか浮かばなかつたので、ライティングセンターの浜川さんに引き出してもらいました。今までどういう体験をしたことがあるかとか、中国について感じていることを会話の中で書き出していくんですけど、自分で考えてきたことを文章にして、それを見てもらいました。途中で、文章が半分以上変わつてしまいましたね。でも、いい原稿ができたと思います。

—コンテストには、準備万端で?

90%くらいは。私緊張しやすいので、10%は気持ちの問題。完璧ではないことは分かっているんですけど、絶対に間違えないようにしようということで挑みました。

4人でずっと練習してきたんですけど、本番の時は、友人や王先生の顔を見たりとかしたら、ほつとしましたね。会場を眺めて、いつもの気持ちを保っていたので、あとは口が勝手に動くというか体が覚えているので、発表時間の3分30秒が短く感じられました。

—2位という結果については?

とても嬉しいんですけど、最初に母に連絡を入れたら、「あんたはすごいけど、あんただけじゃないから」みたいな。「練習とかいろいろな方に協力してもらつて、それを発表する係になつたということだから、みんなに感謝したい」と言われて、本当だなと思つて。

—以前、お姉さんも出場したそうですね。

いま姉は4年ですけど、1年の時に彼女も2位を取つたんです。このコンテストで1位と2位の人は台湾研修がプレゼントされるんですけど、私は2月から台湾へ留学するので、行けないんですね。

—台湾へ1年間。

そうですね、勉強もなんですけど、友人をたくさん作りたいと思つていて、いいサークルがあつたら入りたいですね。勉強は絶対頑張ろうというのはあるんですけど、やっぱり暮らすからには楽しみたいの

で、いろんなものを食べて、いろんな所へ行って、サークルでいろんな経験をして、満喫したいですね。

—なぜ中国語を勉強しようと思った？

私が通っていた高校に中国語の授業があり、ちょっと面白いなあって。英検は準2級で英語も好きだったんですけど、そのうち姉が沖大で本格的に中国語をやり始めたりして、私もやりたいなという気持ちが強くなりました。

沖大に入ったら中国語に染まろうと思って、王先生の授業は絶対取ろうと思っていました。渡邊先生の授業も取っていて、顔塚先生の授業も他にもたくさん、私の時間割は中国語と沖繩関係で埋まっています。

HSKという中国語の検定試験があるんですけど、去年からその勉強を始めて、周りにも頑張っている友人が多いですね。みんなで頑張っているの、すごく楽しみながらやっています。

—目標はお姉さんですか？

姉を目指そうではなくて、友達感覚なので一緒に勉強し合えたらという感じですかね。中国語を使って姉とおしゃべりするのは楽しいので、スラングも入れたりして話せたらもっと楽しくなるんじゃないかなという点では、姉はすごくいい刺激になっています(笑)。(2015年12月25日)



国際コミュニケーション学科4年
北川 皐月さん
(陽明高校出身)

—中国語を勉強しようと思ったのは？

たぶん、中学3年の時に浦添市と泉州市の友好交流会に参加したのがきっかけだと思います。半日だけ中国の家庭で過ごしたんですが、その家族がすごく良くしてくれました。指さして一杯話しかけてくれたけど、でも私わからないうし、すごく残念というか、もどかしくて。

高校2年の時に中国語の授業があり、それで勉強したんです。翌年、冊封使の徐保光の道歩もう会という会で上海に行く機会があったのですが、習った中国語を使ってみたら、通じなかった。なにを言っているのか今度こそ分かると思って行ったの！

—それで、大学では中国語を？

進学についていろいろ考えはあったのですが、進路の先生に中

国語を勉強するんだったら沖大に行った方がいいと言われて。一般入試に合格したので、やった！という気持ちでした。

進路が決まったことを先生に伝えたら、「じゃあ、沖大で一番を取るくらいの気力で行け」と言われて、もうずっとそればかり頭に入れて、1年の時から張り切ってたんです。絶対1番取るみたいな授業は遅刻も欠席もしないように宿題もちゃんとやるように、やることはやろうって、毎日を過ごしていた感じです。それから自分で練習したいなと思って、中国語で書いた日記を王先生に添削してもらいました。王先生、よくしてくれますよ。

—3年になって台湾へ語学留学を。

東海大学の芝生の中にすごい形の教会があつて(笑)、なんか観光地みたいでしたね。びつくりです、ぜったい学生じゃないでしょうっていう人もいて、ベビーカー押して散歩したり、おじいちゃんとかがジョギングしてたり。のびのびした雰囲気でした。構内を全部回りがれなかつたんですけど、牛とか豚とか鶏とか、見どころ満載だと思えます。

留学行く前は、日本人と絶対つるまないぞと思ってたけど、つるんでましたね。最初は日本人みんな協力しようぜっていう感じで固まっていたんです。でも授業

が始まってしまえば、それぞれクラスも違ってしまふので。

—クラス分けを？

能力テストを受けて、クラスに分けられたんです。私は中級クラスになったんですけど、中級クラスは別の建物に隔離されてるみたいでした(笑)。これってある意味チャンスじゃないですか。自分とタイの少年と韓国人のおじさんの3人で授業受けてましたね。沖大生は他に4名いましたけど、私違う建物にいたので、休み時間にわざわざ交流しに行くわけにいかないじゃないですか、この少年とおじさんとはしゃべっているから。

—華語中心という隣の建物には日

本人もたくさんいるし、いろんな国からの留学生がいるんです。例えば歓迎パーティを華語中心に集まってやるんですけど、私達の隔離クラスが行くと、アフターするんですよ。だから、みんなは楽しそうにワイワイやっている中、ちょっとアウェイな感じ。今更ながら「あつ初めまして」って感じだったので、最初はちょっと寂しい面もありました。友達が知らない友達と楽しそうにしているのを見ると、あー友達いっばいできてるんだとか、若干寂しくなったりしました。でも、後半はそんなことなかったですね。だから、大丈夫でした。寂しかったのは、最初の一瞬でした(笑)。

—語学の方は？

ほんと、行って良かったです。聞く力がすごく上がったなと思います。でもうまく言えないことが多いので、話す力がもうちょっと欲しいなという感じですよ。

友達との言語交換ではできるだけ中国語を使うようにして、後半少しずつ話すのに慣れてきたら、楽しい、という時に帰国だったから、もう少しいたかったなという気持ちもあるんですけど。

あと、沖繩について聞かれることがたくさんあるんですけど、「だったような気がします」ということが多くて。沖繩や日本について知らないということ、身に染みしましたね。自分の出身地のことを聞かれたら話さないといけないじゃないですか。せっかく沖繩から来て、沖繩のこと知らないのかい？って思われたら悔しいし、政治の話もされて、「はっ、知らない」ということが多かったから、もうちょっと新聞読んでたらよかったです。

自分の中では中国語を勉強するっていうのが大きいんですけど、中国語だけ勉強していても意味ないかなって思いましたね。みんなもそう言っていました。逆に、台湾の学生はなんでこんなに台湾のことを知っているんだろうって。

―留学中のエピソードを。

留学先でもスピーチコンテストがあつて、それに参加したんです。せっかく来たから、爪痕残してやるという気持ちで(笑)。王先生はその時アメリカにいたので、スカイプで、私こういうこと発表するんですけど。スカイプを通して私のスピーチを聞いてもらつて、「大丈夫です、聞き取れました。でも北川さん、発音下手くそになりましたね」つて言われて、一瞬で血の気が引きました。だって、発音が命ですつて何度も言つていた先生だから、発音下手くそになりましたねつて言われた瞬間、台湾での授業では「あなた発音上手ね」つて言われていたので、「つけ上がった、私」つて思つて先生の一言で、また発音の練習を始めました。

―爪痕残しましたか？

残せましたよ。それぞれ工夫凝らしてスピーチをしてる人がたくさんいたんですけど、1位取れませんでしたね。同時に、人気王という、スピーチした人で誰が面白かったとか、みんなの印象に残るような人気投票があつたんですけど、あれも1位取つてしまつて。たまたまだと思います、私よりもいい発表していた人つていっぱいいたから。謎ですね。

―それは謎のままでも？

いいです。ありがとうみんなという感じなので(笑)。

―最近は何を？

9月から沖縄特別通訳案内士の研修を受けていて、1月9日が認定試験だから、どうにか受かるようにしないと。10人のクラスなんですけど、周りは北京のホテルで働いていた人とか、上海に住んでいた人とか経歴のある方ばかりで、やっぱり中国語話すの上手だなつて思うことが多々あります。ついでに必死、必死、必死、みたいな。それから、この通訳案内士が沖縄の観光産業にどれくらい貢献しているのかなというテーマで論文にまとめてみようと思つていて、この冬休みが勝負だなと思つてます。

―妹さんも頑張つてるようですよ。

私よりストイックだと思えますよ。テスト前、朝3時に早起きしてやつたり。私も今年HSK6級を取れたりはしたけど、妹みたいに集中してやるつて感じではないので。私たぶん感覚でやつてるところが多いと思うので、妹の方が真面目にやつていると思います。(2015年12月22日)



「大学の職員つて、教務課の職員つて、学生が休みの期間は特にやることないですよ？ 意外と暇なんじゃないですか？」私が大学職員として教務課で働き始めて1年ほど経ち、学生からこのような質問をされたことがあります。その時、ある記憶が蘇りました。私自身も大学時代同じような疑問を抱いたことがあつたなど。さらに遡ると、小中高とそれぞれ似たような疑問が頭をよぎる瞬間があつたなど。「警察官の事件がない日」、「プロ野球審判の試合のない日」、「総理大臣の国会のない日」。本業以外の時間は何をしているのか、意外にも暇を持って余しているの

ではないか、と。もちろん深く考えたわけでもなく、単なる素朴な疑問としてです。

しかし、自分が質問をされる側になつてある感情が芽生えました。あの時の警察官、あの時のプロ野球審判、あの時の総理大臣(おそらく小泉さん)、すみませんでした！と。

それぞれの職種に暇な時間などなく、クローズアップされる本業以外の時間も常に動いているのです。「大学職員の講義のない日」も同じです。教務課では学生が休みの期間に成績の処理や時間割の設定を行い、それらに加え、イベント事や細かい業務も多々あります。

私はその質問に対してすぐに否定しました。「学生が休みの期間も、学生が講義を受けている期間と同じくらい業務があるよ」と。

置き換えて考えると、言わば学生の本業は単位を取得し、無事に卒業することです。しかし、その他の時間に何をするかも非常に大切で、沖大生のみならずは様々なことにチャレンジできる環境にいます。例えば、昨年は法経学科のゼミ生が先生と協力し、「沖縄の業界地図」という素晴らしい本を製作・発行しました。また、チャレンジ沖大生や琉球弧支援など、沖大でしか経験することができない「本業



以外の時間」が多々あります。さらに就職活動や資格取得のサポートがある環境にいます。出来ること、やるべきことは無限にあります。沖大というキャンパス環境を最大限に生かしてください。そして、いつかされるかもしれないあの質問に対して、堂々と答えてください。「大学生つて、講義以外の時間は何してますか？」

次回は、構内の設備を熟知する、いつも笑顔の施設課・浜比嘉さん、よろしくお願ひします！

筆者が2014年度に法経学科長をしていたときに、加藤前学長より積極的な働きかけもあり、2015年度から法経特殊講義として「ワーカーズコープ論」が日本労働者協同組合連合会からの寄付講座として夏期集中講義で開講されることになった。講義には加藤学長も参加され講師と学生の議論に熱心に耳を傾けられていたことが印象深い。

筆者についても、短期大学から法経学部に移籍してから「仕事と生活の経済学」を担当してきたこともあり、ワーカーズコープ形態によって仕事おこしをするということについてこれまで関心を持ってきた。

歴史的にみるならば、19世末から20世紀初頭にかけての自由主義経済体制シテムから巨大企業による寡占市場支配を基礎にした不完全競争市場体制への移行によって、シドニーとペアトリスのウエップ夫妻による生産協同組合存立の可能性に対する否定的見解が唱えられて以来、20世紀以降のコンシューマーズ・ムーブメントにも呼応して消費生活協同組合が注目を集めてきた。それが1970年代から80年代にかけての

研究のひろば

「ワーカーズコープ論」 ついに開講!



教授 小林 甫
法経学部法経学科

ニクソンショック、オイルショック等の経済危機によって20世紀を支えてきた経済的フレームワークが根底から覆されることになり、政府による住民サービス能力の低下、民間企業の雇用創出能力の低下に見舞われることになった。そこで、自分たちの手で仕事をつくり生活を支えていくというワーカーズコープの考え方が再び脚光を浴びることになったのである。

このワーカーズコープの考え方は、自ら出資し、自ら経営し、自ら労働するという、所有と経営と労働の三位一体によって事業活動を行うという点にあり、所有と経営の分離により事業を行うという株式会社形態の上をいく新しいビジネスの形態であり、沖繩では1990年代の中ごろから取り組まれていた、高齢者への配食サービスからデイケアサービス、その他の領域へと活動域を広げてきている。沖繩の場合、よく失業率は本土の二倍といわれるが、最近の雇用情勢の変化もあり、本土から青田刈りに沖繩に求人が増えてきている。しかし、この地域に根を張り三位一体で地域を発展させようという事業形態で雇用を創出するという形態を研究する意義は大いにあるのではないだろうか。

わがゼミナール

沖繩戦後70年を越えて

人文学部こども文化学科 准教授 須藤 義人

島に始まり、硫黄島、そして沖繩本島へと、持久戦の方法がとられたことを学ぶ。そして、この島での戦術転換が、沖繩戦の住民被害を増大させたことを現場から読み解く。その平和教育プログラムの一環として、戦後70年の慰霊の日の直前に「沖繩戦後70年の住民平和宣言」を開催した。沖繩戦に巻き込まれた住民の視点から「住民平和宣言」を発信することを目的とした。学生たちにとっては、一住民として反戦ボランティアをしているという意識を持つ機会となった。

また、沖繩戦体験者の保志門（ほしかど）繁さんからの依頼で、「ガマフヤー」とゼミ生で遺骨を探すことになった。保志門さん一家が隠れていた壕に米軍の砲弾が降り注ぎ、爆弾の破片が幼い妹の命を奪ったという。沖繩戦で亡くなった妹のものとみられる遺骨は、5日間の捜索を経て、八重瀬町新城の山中で発見された。学生が見つけたのは、子どもの頭蓋骨の一部であった。保志門さんが「節ちゃん、長い間迎えることができてごめんね」と骨に語りかけていたのを、学生たちは静かな面持ちで眺めていた。

那覇市真嘉比で発掘された戦争遺物のある部屋で、その独特の匂いを嗅ぎながら、戦争につ

いて共に考えてきた。そして具志堅隆松さんの静かな語り口に耳を傾け、写真と照合して記録作業を行ってきた。造成開発によってコンクリートで覆われる前の激戦地跡において、無理のないペースで「ガマフヤー」（穴掘り人）になる。学生たちは汗を流しながら、当時の戦争風景を出土品から想像して、戦争に巻き込まれたり、徴兵されたくないと思いを新たにしていく。「ガマフヤー」の精神が、着実に若い世代に継承されることを期待して、地味な作業を続けていくしかない。



2015年度

教員採用試験現役8名、過卒者を含め28名合格

沖縄県をはじめ全国の公立学校教員候補者選考試験が終了し、こども文化学科の現役生8名が合格しました。過卒者を含めると28名が合格しました。13年度現役合格者6名(過卒者を含め9名)、14年度現役合格者8名(過卒者を含め15名)となっており、本学出身の合格者は、近年増加しています。現時点で把握している合格者数をお知らせします。
(2015年12月3日付け)

- ◆小学校(こども文化学科)現役8名
幸地絵莉(知念高校卒)、崎山愛夏(那覇高校卒)、高良龍太郎(那覇高校卒)、天願風樹(具志川高校卒)、當山博樹(首里高校卒)、仲村渠菜絵(那覇国際高校卒)、与那嶺亘(名護高校卒)、保坂桃子(那覇国際高校卒)
- ◆卒業生からも「合格した」との知らせが届いています。
- ◆小学校(こども文化学科)卒業生18名
- ◆中学校(社会科)(法経学科)卒業生1名
- ◆高等学校(地理歴史)(法経学科)卒業生1名

し、2年後には税理士になって地域のために働きたいと、現在意欲的に勉強中。

税理士試験2科目合格

法経学科4年 仲座 大一人さん
(八洲学園大学国際高出身)

2年次の頃から税理士を目指すようになったという仲座さんは、昨年8月に行われた今年度の税理士試験で、「簿記論」「財務諸表論」に合格しました。奥山正剛教授(会計学)の講義はこれまですべて受講し、今回受験した2科目についても多くのアドバイスを受けたようです。税理士になるには、5科目の試験をパスする必要があります。来年は「消費税法」「法人税法」を受験

平成27年度沖縄特例 通訳案内士育成研修 資格認定試験合格

国際コミュニケーション学科4年

北川 皐月さん
(陽明高校出身)

沖縄県が実施している「特例通訳案内士(中国語)」の育成研修に参加していた北川さん(本紙14頁)、資格認定試験に無事合格したと知らせが入りました。

高額寄附のお礼

沖縄ANDOGネットワーク(依存症援助の非営利団体)の小松知己様より二百万円のご寄附を賜りました。

小松様のご意思により、精神保健福祉士・社会福祉士を目指す学生への冠奨学金・教育研究費へ充当させていただきます。深く感謝申し上げます。

「私立大学等改革総合支援事業」に採択

平成27年度文部科学省私立大学等総合改革支援事業において、沖縄大学は、タイプ2「地域発展」に採択されました。

本事業は、教育の質的転換、地域発展、産業界・他大学等との連携、グローバル化などの改革に全学的・組織的に取り組む私立大学等に対する支援を強化するもので、沖縄県内の私立大学では、本学が初めて採択されました。沖縄大学憲章「地域共創・未来共創」をより一層推進し、地域の発展に寄与していきます。

■タイプ2「地域発展」

地域社会貢献、社会人受入れ、生涯学習機能の強化等を支援。

同窓会館より



同窓会ピアノコンサート

本格派ピアニストの池田育代さんの演奏で、プーランク、ドビュッシー、ショパンの曲を楽しむクラシックコンサートが開かれました。後半は、フルート奏者の仲吉加代子さんを交えて親しみのある曲が奏でられ、和やかな雰囲気同窓会館は包まれました。

主催：同窓会女性部会(2015年11月23日)



ライブラリートーク「筆文字あーと」

書家の田場珠翠さんをゲストに迎え、筆文字あーとの実演と講演会が開かれました。精神統一、渾身の筆さばきで現れ出た文字は「創造」。「地域共創・未来共創」に取り組む学生たちへ贈られたこのメッセージを、同窓会館もしっかり受け止めたいと思います。

主催：図書館(2015年12月15日)



沖縄大学は、国が義務づけた第三者評価として、公益財団法人大学基準協会の相互評価の審査を受け、同協会の定める「大学基準」に適合しているとの認定を受けました。認定期間は、7年間(2014年4月1日～2021年3月31日)です。

編集後記

インタビューで聞けた、かけがえのない話。みなさん、すごいなと思いました。
2千人の大学に、2千のエピソードがある?
(後藤)